

とするものと思われる。

- 部隊長等の性格或は要所に位置していない等のために一見目立たない部隊においても、驚嘆に値いする戦果を挙げているものもあり、これらの部隊の成果を顕著させたいためにも、幕僚の第1線進出等による積極的実情把握の努力を必要とするものと考えられる。

又信賞に比して必罰は戦場においては極めて行いが、真に必要なものを断行するに躊躇すべきではないと考えられる。

取扱注意

2-75

取扱注意

d 作戦方針と軍需品の集積量及びその配分との関係

- (1) 戦略持久の方針に対し、糧秣は6カ月分を集積されていたが、当時における全般的な物量の不足により弾薬は僅かに1全戦分弱に過ぎなかつた。

しかし既述のように比島向け滞留兵器を大巾に利用し得たので後方部隊の戦力化並びに第1線陣地の重火器密度の増大(1科正面24重砲25・MG10)に寄与する所大なるものがあつた。

- (2) 軍需品の大部を第1線部隊に交付、保管させ、殆んど予備を有しなかつたことは、島尻地区における沿岸撃滅の方針には合致していたとも言えるが最も公算の多い首里周辺陸正面に兵力を集約して行うことのある持久態勢には必ずしも即応していなかつたものと謂い得よう。

取扱注意

2-76

○ 兵站の作戦に及ぼした影響並びに作戦方針の変更が兵站に及ぼした影響

(1) 弾薬の集積量が併かに1会戦分であつたことにより5月4～5日における2日間の攻勢実施によつて軍砲兵はその弾薬の大部を消耗し、爾後の持久戦に大なる影響を受けるに至つた。

(2) 軍需品の大部を第1親兵団に交付していたことは、兵站部隊の戦力化を可能にしたが、24D及び44MBを陸正面に転用後、両兵団の補給を困難にするに至つた。

(3) 首里周辺を複廓とする当初の構想を変更し喜屋武復原陣地に後退の余儀なきに至つたため、首里周辺に集積した軍需品並びに重傷患者の移送を至難ならしめるに至つた。

(4) 参考所見

○ 指揮官、幕僚は常に作戦と同等の比重を以て兵站到る大なる関心を払い、特に兵站と作戦方針との吻合について留意する必要がある。これがためには戦況の推移についての先見洞察が必須の要件ではないかと考えられる。

○ 予備の軍需品を有しないことは著しく作戦行動の自由を拘束するので、第1親兵団に対する配分率の検討は特に慎重を要すると思考される。

○ 作戦方針の変更は兵站到る著しい影響を及ぼすこと痛感される。

7 沖縄陸上作戦の成果

本作戦の特色に鑑み先づ本作戦の主役をなした我が航空作戦に及ぼした影響を、次いで本作戦の最終目的であるわが本土作戦準備に及ぼした影響について考察することとする。

a 32Aの陸上作戦が、わが航空作戦に及ぼした影響

(1) 飛行場等の使用妨害

本作戦において最も問題となつた敵の北・中飛行場使用妨害は、既述のような32Aの配備変更、この間における上・下級司令部の調整の不備及び台湾から増強予定の32MIRの未到着等により、遺憾ながら必ずしも予期のような効果を取めるに至らず実質的にこれを妨害し得た期間は数日を出でなかつた。

即ち米軍はL日既に北・中飛行場を手中に入れ、L+3日にして観測の、又L+7～10日にして戦闘機の使用を開始するに至つた。

これに対し32Aは、主陣地帯内からする長射程砲2門によりL+6日から射撃を開始し、一時は中飛行場の指揮塔を吹き飛ばすような成果を取めたが、L+12日には砲の破壊により沈黙の己むなきに至つた。この間において実質的に射撃を行つたのは6～7日間で、しかも間けつたのであつたので、その実効果は僅少であつたと32A自身が上級司令部に報告している。

しかし米軍が本格的に南飛行場の使用を開始し、わが航空部隊の特攻攻撃に著しい実害を与えたのはL+20日以降であり、これは主として米軍の飛行場の修復拡張能力による所大であると思われるが、一面この間における32Aの妨害効果も亦少からぬものがあつたものと観

察される。

(2) わが航空部隊に及ぼした心理的感作。

北・中飛行場の喪失が、実質的にわが航空作戦に実害を及ぼしたのは既述のようにL+20日以降であつたが、上陸第1日にして両飛行場を米軍の手中に委したことは、航空部隊並びに上級司令部に極めて深刻な精神的打撃を与えこれによる心理的悪感の方がより大であつたように観察される。

即ちわが上級司令部及び航空部隊は近く米軍が、これを本格的に使用することに対する不安と焦慮の念に駆られながら航空作戦を実施するの余儀なきに至り、引いてはこのために地上作戦指導をも混乱に導いた感が深い。

b 本土作戦準備に及ぼした影響

(1) 米軍の空・海基地推進に対する妨害

32Aの任務の主眼とも言うべき、敵のわが本土攻略のための海・空基地推進の破摧は、遂に達成し得ず特に比較的早期に戦闘機基地の推進を許したことは遺憾であつたが、敵の海上基地(那覇港・中城湾)の使用は3カ月以上にわたりこれを妨害し得た。

又これに伴い敵の本格的基地建設を相当に遅延させ、約3カ月にわたり爆撃機による本土攻撃を許さなかつたことは、特筆すべき成果と考えられる。

(2) 持久日数

本作戦に対し、暗々裡に期待されていたわが本土作戦準備のため時日の余裕を得ることについては、32Aの作戦計画及び作戦指導が前述空・海基地の推進破摧よりも、むしろ本件を主眼としていたことと第1練兵団以下の言語に絶する勇戦敢闘並びに壮烈鬼神を泣かしめる航空部隊の果敢な特攻と相俟つて3カ月の貴重な時を獲得しわが本土作戦準備を概成させ得たことは、本作戦の最大の成果と謂い得るであろう。

事実米軍は中・南部沖縄の占領のため計画より2倍の時日を費すに至つた。

(3) 出血の強要

前(1)及び(2)項に関連し、米軍に甚大な損耗を強要することも本作戦に期待された重要要素であつたが、諸般の関係上敵の上陸前後における弱点に乗ずる出血の強要は実現を見るに至らなかつた。

しかし後の陸上戦闘において32Aは、比較を絶した米軍の戦力に対抗しつつ約65,000名にわたる損害を致し強要し、即軍の決戦として指導されたレイテ作戦において敵に与えた損耗約15,000名を遙かに上回る甚大な出血を与えた。

かくて沖縄島民の敢闘と相俟つて敵の心胆を寒からしめ日本軍及び日本民族の精強性を遺憾なく発揮して米軍のわが本土に対する攻撃を一段と慎重ならしめるに至つたものと観察される。

32A作戦計画及び作戦指導の功罪

(1) 作戦計画

(a) 32Aの作戦計画はその根本戦略思想の陸戦偏重によつて既述のように航空作戦に対する直接的寄与即ち最も重視を要する中頭地区に対する敵の航空基地推進に対しては極めて不十分であり、かつ同正面からする敵の上陸時における弱点に乗ずることをみすみす放棄したものであつたが、島尻地区に対する海空基地の推進破砕並びに地上軍自体による持久については徹底した策案であつた。

(b) 而して3ヶ月の時を稼ぎ敵に大なる出血を強要し得た主因は持久のための好適の土俵場である首里周辺高地帯の活用と島尻地区に対する徹底的兵力集約の賜物であると言ひ得よう。

(c) 然し糸満海岸正面の過大評価並びに戦況推移の予察上問題があつたために島尻地区沿岸のすべてを要塞化しようとしたので、中頭地区に充当すべき最少限度の戦力をも欠くに至るとともに首里陸正面に対するA主力の兵力集約の機を失するに及んだのではないかと観察される。

(2) 作戦指導

- (a) 事前における司令部内及び上級司令部との思想統一の不備等により遺憾ながら32Aの作戦指導は必ずしも首尾一貫せず守勢と攻勢との両極限間を絶えず動揺していた側があり、ために下級兵团、部隊に少なからぬ悪感を与え、かつ、戦力を過早に消耗するに至つたように觀察される。
- (b) しかし上級司令部の責任に帰すべき点も少なくなく孤立無援の状況下、圧倒的鉄量の中にあつてよく3ヶ月間組織的戦力を発揮し得た所以は、A長の人格に基く統率力と第1線部隊の精強によることはもとよりであるが、32A首脳部が幾多の迂余曲折を経つつ曲りなりにも当初の方針を貫いた賜物と謂うべく、特にこの間におけるA長の攻勢中止の断、幕僚長の明快な主力転用の決意及び作戦幕僚の持久方針堅持の意見具申は与つて力あるものがあつたと謂い得よう。

区 摘 要

<p>A</p> <p>捷号計画により作戦実施の場合の1般想</p>	<p>日(62D.24D.9D)</p> <p>地は当時の日本軍の見積及びレイテ、沖</p> <p>濃を考慮して4コDとする。</p> <p>付録1</p> <p>艦2時の兵力</p> <p>付録2</p> <p>航付録3</p>
<p>B</p> <p>米軍上陸後の実察の状況</p>	<p>地</p> <p>30日、4月1日の実効</p> <p>艦近に砲艇の火力が及ぶが除外した。</p> <p>航軍の編組から概算</p>
<p>ることも困難であるが参考迄に私の説明及び</p> <p>戦力の充分な発揮が困難な状況で決</p> <p>あつた。</p>	

沖縄作戦（米軍上陸時）における日米両軍戦力の比較

親司令部との思想統一
Aの作戦指導は必ずし
両極限を絶えず動揺
兵団、部隊に少からぬ
早に消耗するに至つた

すべき点も少くなく孤
中にあつてよく3ヶ月
は、A長の人格に基く
ることはもとよりであ
る。余曲折を経つつ曲りな
りと謂うべく、特にこの
i、幕僚長の明快なA主
i久方針堅持の意見具申
:謂い得よう。

区 分	日本軍戦力		米軍戦力		火力比		摘 要
	兵力	火力	兵力	火力	地上火力	総合	
A 捷号計画により作戦実施の場合の1設想	地上兵力	3コD 軍直部隊	近戦火力 14.7t/分 F A火力 6.6t/分	4コD 軍軍団砲兵	近戦火力 34.8t/分 F A火力 14.6t/分	1:2.3	1 日本軍師団(62D.24D.9D) 2 米軍師団数は当時の日本軍の見積及びレイテ、沖縄における実績を考慮して4コDとする。 3 火力の計算 付録1 1:4.7 1 レイテ上陸時の兵力 2 火力の計算 付録2 同上 付録3
	艦 砲			B×6 D×6 CA×3 CL×3	44.1t/分		
	航 空			艦載機140機 1日延500機	5t/分		
B 米軍上陸後の実際の状況	地上兵力	2.5コD 軍直部隊	近戦火力 12.0t/分 F A火力 5.3t/分	4コD 軍軍団砲兵	近戦火力 34.8t/分 F A火力 14.6t/分	1:2.9	1:8.5 1 艦数は3月30日、4月1日の実数 2 他に水際付近に砲艇の火力が及ぶが除外した。 1 機数は上陸軍の編組から概算
	艦 砲			B×10 D×23 CA×7 CA×4	84.4t/分		
	航 空			艦載機500機 1日延約1200機	12t/分		
説明及び観察	<p>1 決戦時には米軍の第1機師団及び支援砲兵は揚陸を完了し、両軍とも損害はないものとしての数字である。 また日本軍の海軍根拠地隊、国頭方面配置部隊等は決戦に直接関係ないものとして除外してある。</p> <p>2 捷号計画により配備していた時に返に米軍が直接沖縄に進攻してきた場合、如何なる様相を呈するかは設想することも困難であるが参考迄に我の洋上決戦が失敗に帰し、レイテ島上陸時程度の米海空戦力が指向された場合の数字を算出した。</p> <p>3 数字の細部は別として本表から次のことが観察される。</p> <p>a 9Dの転出による地上戦力比に対する影響は相当に大であつた。</p> <p>b しかし捷号計画に基き上陸米軍を撃滅するためにも、火力比の観点からみれば沿岸要地を確保する等敵地上戦力の充分な発揮が困難な状況で決戦を指導するとともに敵の海空火力の滅殺封止等の処置が必要であつた。</p> <p>c 4月上旬32Aが攻勢を取り、陸上に地歩を占めた敵を撃滅することは火力比のみの観点からすれば無理であつた。</p>						

取扱注意

付録1

沖繩作戦関係日米両軍地上火力概算表

火 器	1火器 1分間 弾 量	日 本 軍								米 軍					
		9 D		24 D		62 D		44Bs (-)		軍直部隊		1コ師団		軍直部隊	
		装備数	火力	装備数	火力	装備数	火力	装備数	火力	装備数	火力	装備数	火力	装備数	火力
小銃等			150 ^k		150 ^k		150 ^k		80 ^k				300 ^k		
LMG.BAR	0.6 ^k	300	180	300	180	400	240	120	72			540	324		
BMG	1.2	100	120	100	120	90	108	40	48	150	180 ^k	90	108		
A T . T K															
37mm	7	12	84	12	84			4	28	13	91	13	91		
47mm	15									52	780				
57mm	20									14	280	57	1,140		
75(76)mm	36											77	2,772		
M															
重 擲	3	300	900	300	900	400	1,200	120	360						
60M	20											90	1,800		
Bia軽迫	40	18	720	18	720	16	640			102	4,080	54	2,160		
150M	50									(24	1,200)				
32臼砲	60									24	1,440				
F A															
75mm	36	48	1,728	20	720	16	576	4	144	16	576				
10H	32			16	512			8	256			54	1,728		
15H.15K	40			14	560					44	1,760	12	480	144	5,760
20H	45			2	90										
計															
近戦火力			2,154		2,154		2,338		588		6,851 (1,200)		8,695		
FA火力			1,728		1,992		576		400		2,336		2,208		5,760
計			3,882		4,146		2,919		988		9,187 (1,200)		10,903		5,760

備 考

- 1 弾量は持続発射速度により算出し、比較に便なように類似火器は一括して概数により調整した。
(これがため観察の参考付表3、日米両軍師団戦力比較表の数字とは若干差異がある。)
- 2 44Bsは4コ大隊の概算である。
- 3 両軍の軍軍団直轄部隊は本来の火力支援任務部隊のみを計算し、高射砲、沿岸砲台等は除外した。

取扱注意

艦砲火力計算

1 代表的米艦の1分間発射鉄量

艦種	備 砲				1分間火力	備 考
	口径	数	発射速度	弾 量		
B B	16吋	9	1	945k	11.9 ton	ミズリー級
	5	片舷10	10	24		
"	14	12	1	650?	9.7	カリフォルニア級
	5	# 8	10	24		
C A	8	9	2	114	3.4	アラスカ級
	5	# 6	10	24		
J L	6	9	5	40	3.2	
	5	# 6	10	24		
D D	5	6	10	24	1.4	
D L	5	2	10	24	0.5	

2 上記発射速度は長時間に亘り持続することは不可能であり、更に航行弾数の関係からも制約を受ける。また地上兵器と比較する関係からみるとこのままの数値では6吋砲は地上の15加の5倍の火力ということになり稍過大と思われる。

3 適当な基準はないが上述の関係からみて今回は上記数値の半を採り、下記を計算に使用した。

B B	5	ton
C A	1.7	#
C L	1.6	#
D D	0.7	#

航空火力の計算

- 1 艦載機(グラマン F4F)を例にとれば爆弾搭載量は900kである。(実際の平均はこれより相当に少いと思われる)
- 2 15加、15榴を例にとり上陸作戦時の1日平均発射弾量をみると平均約3 ton(幕元)であり、これを基礎にして1日に発射(投下)する鉄量と比較すれば艦載機1日延(3~4機が15H、15Kの1門に相当することになる。
- 3 上記数値は砲種、戦況等資料の取り方で相当の差異を生ずる。また次元の異なる航空火力を単純に鉄量のみで地上火力と比較することにも不合理はあるが、今回は便宜上、上述の関係により艦載機1機(延)の火力は、15加、15榴の火力(1分間の火力にすれば10k)として、計算した。

沖縄作戦の観察

(主務者第2次案)

第3 各兵団および主要部隊の戦斗

目 次

1 各兵団の防禦構想と配備	3-1
a 捷2号作戦準備時期における24Dの配備とくに嘉手納海岸正面主陣地線の選定	3-1
b 62Dの最終配備	3-4
2 築城および訓練の実績	3-12
a 築城実施上の障害および配備の変更が築城に及ぼした影響	3-12
b 洞窟陣地の価値および短所	3-14
c 築城と訓練とくに幹部教育との節調	3-18
3 各種戦術行動とくに堅固な陣地の防禦における連大隊の戦斗就中、その防禦力	3-21
a 賀谷支隊の連滞行動の実績	3-21
b 前進陣地(とくに161高地)守備部隊の持久度	3-23
c 4-09~10における嘉敷主陣地守備部隊(131Bns)の防禦戦斗とくにその成功の原因	3-24
d 4-19~20における牧港付近62D主陣地左翼崩壊の原因	3-28
e 4-20伊祖付近における64Bの逆襲とくにその失敗の原因	3-31
f 5-04~05、A主力の攻勢における1Bn/321R(伊東大隊)の攻撃とくに成功の原因	3-33
g 4-下旬~5-上旬、前田付近における121Bns(賀谷大隊)基幹の敵中孤立戦斗とくにその成功の原因	3-35

✓ h	天久台付近における15M1R _a /44MB _a の防禦戦と とくに比較的時間の余裕のない場合の防禦力	3-37
4	TK、FA部隊の戦斗および普特機の協同	3-42
a	主要段階における27TKR(-)の用法、配置および 戦斗	3-42
b	主要段階における軍砲兵隊等の用法、配置および 戦斗	3-45
✓ c	嘉敷および天久台戦斗における普、特の協同と くにその成功の原因	3-47
d	攻勢時における1Bn/321R正面の普機の協同と くにその失敗の原因	3-49
5	対TK戦斗	3-52
a	4-19嘉敷地区における231Bns(山本大隊) の対TK戦斗、とくにその成功の原因	3-52
b	各種対TK火器および資材の効果	3-54
6	指揮官の性格等が戦斗に及ぼした影響	3-57
a	伊東大隊(1Bn/321R)	3-57
b	資谷大隊(121Bns)	3-58
c	山本大隊(231Bns)	3-59
d	上記の各部隊がとくに本作戦において勇名を馳せ た理由	3-60

第3 各兵団および主要部隊の戦斗

1 各兵団の防禦構想と配備

a 捷2号作戦準備時期における24Dの配備、とくに嘉手納海岸正面主陣地線の選定

(1) 配備の重点

24Dの基本配備は三正面に殆ど平等の配備を行い、重点正面たる嘉手納正面に徹底していない感があるが、その理由は次のように考えられる。

(a) 敵の上陸の公算は嘉手納正面が最大であるが金武湾正面、北海岸正面にも準備の必要がある。

(b) 32Aの攻勢に際しては24Dもその有力な一翼として攻勢をとる任務があり、これがため有力な予備隊の拘置を必要とするが上記三正面に配備した上更に当初から所要の予備を取ることは兵力上できない。従って敵上陸時にはし余の正面に配備した部隊を抽出して攻勢兵力とする必要がある。

(c) 上記の如く考えた場合には必ずしも当初の配備兵力に重点形成の必要はない。むしろ防禦のための兵力と攻勢に任ずる兵力との比率を如何に計画するか問題がある。24Dとしては三正面に略同等に配備し、決戦時には敵上陸正面以外の部隊を以て攻勢を行うよう融通性ある部署を採用したものとと思われる。

(d) 持久日数

計画どおり順調に行われた場合、A主力の攻勢まで2日2晩の持久である。予期しない遅延を考慮すれば

さらに2~3日の防禦を計画することが必要であるが今後約3~4ヶ月間の準備により嘉手納正面には相当な築城ができる。従て同正面の配備を特に増加する必要はない。

注：座喜味高地にはRcn, 11=00が大工廻地区には12=00が221Rに増強されて工事を行っていた。

- (2) 嘉手納海岸正面の主陣地線について
(a) 考慮される陣地線と各案の利害

○ 第1案

〔座喜味高地—嘉手納—野国の線〕

座喜味高地を北翼の支樑としこれに接続して嘉手納付近の台地を堅固に保持する案であり、敵を水際に近い狭小な地域に拘束し、橋頭堡殲滅射撃の効果を大にすると共に飛行場を陣地内に収容できる利点もあるが左翼の嘉手納飛行場台地は、平坦で堅固な防禦線となる地形がなく、洞窟築城が困難であり攻勢発起までの確保に不安がある。

○ 第2案

〔座喜味高地—△576—大工廻西方台地〕

第1案の左翼を後退させ海岸から約3軒ほどの距離をとつたものである。第1案に比し敵に広い地帯を与えその行動の自由を許す不利はあるがMLR付近の地形は堅固で洞窟築城が容易である。

○ 第3案

〔喜名北方高地帯—△57.6—大工廻西方台地〕
敵の艦砲射撃の威力の最大限に発揮される座喜味高地を棄てるので、最も持久に適する陣地線であるが、我の攻勢に先立つて座喜味高地を敵に与える不利がある。

- (b) 24Dは第2案を採用したようであるが上記の見地に鑑み妥当な陣地線であつたと思われる。しかし座喜味高地がRcn(+11=00)に過ぎなかつたことには若干問題があるように見受けられる。

- (3) 24Dの配備がじ後の作戦準備に及ぼした影響

- (a) 24Dの糸満付近転進後、一時、44MBsの1部、ついで1SRが同地区に配置されたが、32Aの方針が絶対持久に變つたこと、兵力が少で陣地に適合しないこと等により殆んど活用し得なかつた。

- (b) しかし24Dの実施した築城が、一種の大規模な偽陣地としての効果も挙げ、米軍は当方面の日本互抵抗力を過大に評価した。

62Dの最終配備

(1) 陸正面主陣地線の選定

(a) 主陣地線として考えられる各案及びその利害

○ 第1案

〔大山—神山—△161〕

東西の海正面が大で陸正面は狭小である。従つて陸正面からの攻撃に対し、縦深抵抗には適するが、海正面からの攻撃に対し稍薄弱である。なお中央街道(含む)以西の台地は、TKの活動に適し、堅固な拠点となる地形が少ない。

○ 第2案

〔宇地泊—△85—我如古—南上原付近〕

第1案に比し海正面を緊縮し海からの攻撃に対し弱点を少なくする利点があるが、陸正面からの攻撃に対しては正面が広くなり、かつ縦深を減ずる不利がある。たゞし上原高地帯を広く占領し、かつ、15K陣地を内部に抱き得るので上記縦深に関する不利は陣地を堅固に編成することにより補い得る。

中央街道以西の主陣地帯の地形は第1案同様TKの活動に適しまた85高地付近以外は地形が堅固でない。

○ 第3案

〔牧港—喜教—我如古—南上原付近〕

本案は地形上TKに最も堅固な喜教を第1線陣地とするもので第2案の左翼における地形上の弱点を補うものである。第2案に比し不利とする点は牧港付近の海正面陣地が稍弱体化することと、中央の我如古付近が稍薄弱になることである。

○ 第4案

〔牧港—喜教—西原—棚原—△156—ウシクンダ原〕

本案は第3案の我如古付近の弱点を除去し、更に正面を緊縮するもので地形上最も堅固である。

しかし陣地帯の縦深が浅くなり、上原付近を奪取されるときは一帯に小波津付近まで後退を余儀なくされる。また飛行場制圧のための15K陣地の長期確保にも不利がある。

(b) 主陣地線の選定

A. 及びDは概ね第3案と採用したが、実際において第1線部隊は概ね第2案に近い線を主陣地とした模様である。

第1線部隊が上記Bより示されたMLRよりも前方においてその主力の戦斗を行つた理由は、'前進陣地のつもりではあつたが、実際において、頑張り過ぎたためである'とも言われている。いずれにしても第1線部隊は最大限に縦深を利用し、穏やかな戦斗を期したものであろう。

(2) 陣地編成の特色

(a) 戦術編成

首里復讐を中心とする半円形の陣地帯を構成し各陣地帯は小部隊分散拠点式であつた。また 13iBns の喜敷陣地、14iBns の西原一棚原陣地、21iBns の安波茶陣地のように各 Bn ごと骨幹陣地としての復讐が準備せられていた。

配備は陸正面、海正面共略平等で重点はなかつた。

(b) 築城編成

62D に限定せず、在沖艦兵団としての特色を挙げると下記のとおりである。しかして各陣地は当初配備兵力の3倍程度を構築し、増援部隊の収容、配備変更の融通性が考えられていたが作業期間の関係上、自己部隊用で手一杯であつた。

また火力発揮設備も不十分のままであつた。

- 対砲爆、対TKを重視し、反対斜面陣地
- 洞窟（自然、人為）築城に野戦築城を併用
- 歩戦分離 対TK肉攻設備
- 長期持久のための予備設備、棲息、物資貯蔵設備

(c) 火力編成

- 拠点相互支援を重視
- 歩兵大器による側射、斜射、背射
- 迫撃砲、擲弾筒による死角消滅
- DAを持たず、掩蔽上各火器の射方向も限定されていたので火力の集中機動はできなかつた。

(3) 兵力部署

(a) 各Bの担任正面と兵力、

62Dとしては当初より1コの正面に対し決定配備をとることができず適時配備を変更する構想であつたため、各Bの担任地域は兵力に比し大であつた。

この場合敵の攻撃正面の判明に伴い部署を変更する各種計画を準備しておくことが必要であつたと思われるがこの件の史実は明らかでない。

なお与那原付近は、陸正面との関連が少く、かつ63Bの負担が大となるので、D直轄区域とするのも一案と考えられる。また牧港地区は地形上配備上の弱点となり易いので、兵団の境界線とすることなく、63Bに完全に含ませる案も考えられる。

(b) 直轄部隊

兵力が僅少であるが、各Bの配置部隊も臨機予備隊的に使用することが可能であり、また築城実施、掩護等のためにもその方が有利であつたためであろう。

TKRを直轄としているのはAから使用統制されていたことと思われるが、当初機動予備としたのは至当であろう。

62D長の直轄火力が無かつたことは痛手ではあるが止むをえない。これは軍砲兵により補うことができた。軍砲兵隊BQと62DBQが近くにあり相互の協同には便であつたと思われる。

(4) 配備上の弱点

(a) 重点配備をとらなかつたことについて

62Dとしては、陸正面からの攻撃、海正面からの上陸、陸正面と海正面との同時攻撃等を考慮すれば東西海岸および陸正面の三正面に対し準備しなければならず、敵の攻撃方面と主攻が判明したのち配備の重点を形成しようとした。

このような考え方は当時としてはやむを得なかつたと思われるが結果的には逐次の兵力転用、増強となり陸正面の陣地が薄弱ならざるを得なかつた。

(b) 陣地の縦深性について

・第1陣地帯と首里複廓陣地との間の第2陣地帯の準備が不十分であつた。それは兵力、準備期間の関係によるものであるがこれがため、第1陣地帯は、1Bn陣地の縦深と一致することになり、第1陣地帯を突破されたとき、応急陣地を以て第2陣地帯を構成しなければならなかつた。

たゞし、海岸陣地、後方部隊の貯蔵洞窟等が予備陣地として改築利用された。

(c) 東西両海岸正面について

西海岸は、牧港一那覇間で上陸に適し、また、上原付近に比べてTKの行動が容易である。従つて、絶えず西海岸への上陸あるいは海上機動の脅威を考慮せねばならなかつた。また牧港低地および東海岸平地は各

→ 陣内の高地帯からの火力により十分火割されるがこの両正面には敵は艦砲も有効に指向しうるので、もしこの火力が制圧せられた場合には該方面に対する敵の突進を考慮する必要があつたが、62Dの配備では陸正面陣地と海正面陣地との接続部には稍弱点があつた。

(6) 参考所見

(a) 62Dの配備は陸正面に対するための最終配備ではなく戦闘開始後の配備変更を前提としたものと考えられる。このため種々の問題を生じた。即ち62D独力を以て長期にわたり敵の攻撃を阻止する懸念というよりは32A主力の運用と相俟つて敵を阻止し、或いは殲滅することが期待されていたものと判断される。

(b) 上記に依り、主陣地帯の第一線は最終的に敵を阻止する為というよりも、むしろ紛戦状態を作為して敵に出血を強要し、敵を遅滞することを主眼として選定された感がある。

これがため85高地より南上原北側高地に至る第一線には中隊以下の拠点が分散して配置されたが小部隊が孤立して戦う結果となり、比較的早期に敵に占領された。

(c) しかしながら嘉敷一南上原の線には地形を利用し相互に支援された一連の陣地を準備し、他方面からの部隊の投入とも相俟つて頑強な戦いが実施された。従って第一線の各部隊がその命令において主陣地の前線を85高地一宣野河南側一津羽の線としていたとしても、真の意味の32AのVLRは嘉敷一南上原の線と考えても誤りではないとも考えられる。

(d) 上記の判断に於ては62Dとしては嘉敷一上原の線以南にも更に縦深の陣地を準備する必要があつた訳であるが、これが実施できなかったのは兵力と準備期間に制扼されたものと判断される。

(e) 小拠点分散方式の防禦について

62Dの85高地、南上原北側高地以北の戦いが小拠点の分散配置により敵の攻撃の破損を企図したものであつたとすれば、これには問題がある。即ち優勢な敵に対してはたとえ紛戦状態を作為しても直ちにこれを利用して逆襲を遂げない限り、時間の経過と共に各拠点が逐次に占領されて遂には陣地全部を失うことは明らかであり、また中隊以下の拠点ではその独立性と強靱性に期待し得る程度も限度がある。

兵力を節約しつつ敵に出血を与え配備変更の時間の余裕を得ようとしたものであれば充分にその目的を達成したものと見る事が出来よう。

築城および訓練の実績

築城実施上の陸路および配備変更が築城に及ぼした影響

(I) 築城実施上の陸路

任務達成上、作戦のための要求には十分というものはないのであるが再度の配備変更に伴う作戦準備期間の短少に起因して、人、物、時のすべての面に陸路を生じた。

この陸路打開のため各種の手段が講ぜられたが、結果不十分のまま戦いが開始せられ、たとえば、第2陣地帯の弱体、火器設備、地下交通連絡設備等の不十分のため戦いに支障を来した。

陸路となった諸点は次のとおりである。

(a) 抗木の輸送難

洞窟陣地の進捗度は一つに抗木の輸送量により決すとは各部隊の切実な叫びであつて國頭地区からの木材の輸送が最大の陸路となつた。

(b) 作業人員の不足

作戦部隊は築城実施のほか、資材の収集および運搬戦術訓練を実施せねばならず、勤務者を切りつめても不足であつた。

住民は、勤勞奉仕、勞務者の提供等により、殆んど全力を挙げて協力した。

(c) 器材、資材および運搬手段の不足

洞窟構築用の掘削器、さく岩器、爆薬、つるはし、

研磨器の不足

木材、セメントおよびこれが運搬車両、荷車、舟艇などの不足

これらの不足のため結局、応用材料によらねばならなかつた。

(a) 土質は各方面とも洞窟構築には適当であつたが、所によつては岩石地、サンゴ礁の部分を掘開せねばならぬところがあり、多くの労力を必要とした。

(2) 配備変更が築城に及ぼした影響

(a) 築城能率、士気を低下させること甚だしく、従つて作戦開始前までに作戦上の要求を充足することができなかつた。とくに陣地の深堀性付与の余裕がなかつた。

(b) 局地、既設工事に拘われ、戦術上好ましくない陣地編成となることがあつた。(6.2D第1線部隊の火力編成上において、そのような事例がある)

(c) セメント、木材をますます不足させ、また、配備変更の移動のため作業員が少くなり、宿泊、休養設備が不良となり、現地自活もやり直しをせねばならなかつた。

b 洞窟陣地の価値および短所

(1) 洞窟陣地の価値

沖縄では、自然洞窟、珊瑚礁等をも利用し、地下深くに構築されていたので、艦砲、爆撃、大口径砲等のあらゆる火力に対し人員資材を掩護することができた。

従つて、洞窟戦は近接戦により勝敗が決せられたのであるが、洞窟に対しては、内部まで威力を発揮する手段—火焰、煙、瓦斯—をとるか、入口を閉塞する手段—爆薬、至近距離射撃—を必要とし、しかも同時一挙に破壊することが困難であつた。これがため、長期間の持久防禦が可能で、攻者に多くの損害を与えることができた。

(2) 洞窟陣地の短所と対策

旧軍において戦訓としてとり上げられた事項は次の如きものである。

(a) 洞窟の最大の欠陥は藏病となることである。洞窟で起居した部隊を、攻勢または弾雨の中に立たせるといふことは容易ではない。

(b) 対T.K.機能が薄弱で、近戦火網に欠陥を生じ易く、守備兵が消極退却に陥るおそれがある。従つて単に洞窟のみでは陣地は成立せず、必ず、野戦陣地の併用を必要とする。陣地に膠着して主動性を失うことをとくに戒しめねばならない。

(c) 作業力が大である。従つて一度構築開始後における

修正は全般に及ぼす影響が大であるので、戦術編成に關する專門研究を周到にせねばならない。

また、器材、資材の準備を十分に於て構築速度を増大する工夫を要する。

(d) "洞窟陣地の上面に生じ易い垂直射界上の死角に乗じた馬乗り攻撃"を受けることは致命的である。

これがためには、自己火力と支援火力の調整により、所謂"甲羅"の上を他方面から火制することが必要である。

(e) 自衛力の増強、洞窟における近接戦闘のため次のような対応策を講じておくことが必要である。

○ 入口部はTKの近迫困難な位置を選び砲爆、火陥攻撃に対し掩護を十分ならしめる。

○ 火陥対策のため、空気抜入口を相当離隔した位置に準備する。

○ 触角式秘密坑道または潜伏拠点を設備し、組織的に数火点相互連繫ある戦闘を実施す。

○ 坑道には、火砲の陣地変換に当り、少くも分解搬送に支障のないようにする。火砲の瞬間現出、頻繁な陣地変換は敵の砲爆撃を困難にするため有利である。

○ 秘匿した出進口から、火陥手、および爆破作業手を奇襲す。

○ われもまた洞窟内外、適時適所に爆薬戦闘を実施する。

(2) 築城施設中洞窟とすべきもの

- 待機掩蔽部、爆薬、糧食の格納所
- 掩砲(銃)所
- 交通用坑道
- 重要火点

(3) 野戦陣地とすべきもの

- 対TK組織(火力、肉攻)
- 火点または予備火点
- 対近迫攻撃組織
- 逆襲発起位置
- 交通施設

(4) 戦闘に及ぼした影響

(a) 絶大な威力を発揮し、米軍をして苦戦させた最大の原因となった。

(b) 前記各戦訓は本作戰においては大部分が相当に考慮されたものと考えられる。しかし1部においてはお陣地に固着して戦闘の柔軟性を失い、容易に敵の侵透、包囲を許し、或いは警戒を失して馬乗り攻撃に遭う等の事態が生じた。

(c) 配備変更のため作業期間が不足し未完成のまま臨んだので、洞窟陣地としての幾多の欠陥を露呈することがあつた。

(d) 日本軍の戦訓の活用に対し、米軍もまた新兵器、新戦法の案出に努め攻防共に秘術を尽す状況を生じた。結局は米軍は優勢な戦力と優秀な装備によつて逐次に陣地を奪取し勝利を取めたが、それでも最後迄洞窟の一つ一つを多大の時間と人命を費しつつ近接戦斗により処理せざるを得なかつた。

c. 築城と訓練とくに幹部教育との節調

(1) 築城と訓練の節調

捷号作戦準備間、両者はよく調整されたが、11月下旬の配備変更以降の教育訓練は低調となり殆んど機会教育となつた。

即ち、屢次の配備変更のため築城その他で多忙を極め、教育訓練としては現地応召者の教育、職務部隊の戦斗訓練等であつた。

参考までにこの後の南九州作戦部隊の築城と訓練の関係をみると当初築城6、教育訓練4の割合であつたが、予想上陸時期の2~3箇月前から築城4、教育訓練6の割合とした。

在沖繩兵団は、本土部隊より精銳であり、基幹部隊の素質良好、経験も豊富であつたから上記のように築城偏重ではあつたが、実戦に当り特に訓練の不足を思わせるような事態は防禦戦斗に関する限り発生していない。

しかし仮に作戦前なお充分な訓練の機会があれば更に攻撃における紛戦地帯の作為においても実力を発揮したであろうことも争えない所と思われる。

(2) 幹部教育との節調

Aにおいては、とくに幹部教育に意を用い、20年に入つてからもBn長以上に対する対空挺戦斗教育、歩校教官の巡回教育を実施し、各兵団でも、対TK、爆薬戦斗、挺進奇襲等の幹部教育を実施している。しかし敵が嘉手納正面から上陸した場合の作戦構想に應ずる実践的な幹部教育等は殆んど実施されていない。

随つて24D、44MBが首里陸正面に転用されても部隊にとっては生地と等しく、夜襲及び防禦に方り、少からぬ支障を来した。

d 参考所見

- (1) 32Aが沖縄において取めた勝々たる戦果は前述のとおり一に洞窟陣地の活用によるものであつたと言つても過言ではないと思われる。

洞窟陣地には幾多の欠点もある。特に構築に多大の時間と労力を要する点が最大の問題であろう。しかしながら劣勢な兵力を以て優勢な敵の火力に対抗し得る手段としては今日においてもこれに勝るものはない。この点からみて32Aの戦訓は実に貴重なものと言えよう。

- (2) 配備変更が32Aの各部隊に及ぼした影響は甚大であつた。第一線戦斗部隊の実情、特に将兵の心理状態を考へるとき、この種変更は軽々に実施すべからざることが痛感される。

- (3) 戦斗前の訓練の価値については謂う迄もないが、32Aの実情をみても実際問題としては阻害事項が余りにも多く、これがため遂に充分な実施ができなかつたものと察せられる。この種状況下において如何に実施するかが問題であろう。

結果からみればこの場合最少限各種作戦構想における部隊の行動に関する幹部教育は万難を排しても、実施することが必要であつたと言へる。

5 各種戦術行動とくに堅固な陣地の防禦における連大隊の戦
斗、就中その防禦力

a 賀谷支隊の遅滞行動の実績

(1) 式 泉

(a) 兵力および準備

賀谷支隊(12iBns)の任務に基く準備および訓練
は約2ヵ月である。既設陣地として利用できるものが
あつたのは有利であるが、準備期間としては必ずしも
十分でなかつた。また、この種戦斗については支那に
おいて十分経験していたが米軍との戦いは未経験であ
つた。

(b) 遅滞行動

絶対優勢な艦砲、航空、TKに支援せられた401R
に対し軍砲兵隊の協力も受けず殆んど独力を以て実施
した遅滞戦斗であつて敵を遅滞し得た期間は3~5.5
日である。たゞし米軍は橋頭堡の設定及び内陸への前
進の準備に自主的に相当の日時を要したことに留意す
る必要がある。

行動地域は、正面5~6K、縦深4~15Kに及ぶ。
同隊報告によれば戦果は、飛行機墜落2、TKの擱挫
炎上10、敵死傷約600とあるが、損害に関する米
軍側史料は不明である。

(2) 影 響

(a) 賀谷支隊の遲滞戦闘は、彼我戦力の懸隔が過大であつたので前述の如く実質的には精々1~2日間遲滞させた程度と見るのが至当であろう。(もし賀谷支隊がいなければ1~2日間程、米軍の前進が早くなつたであろうとの意)。

(b) 賀谷支隊の遲滞行動が大なる効果を取らず米軍に迅速な橋頭堡の占領を許すに至つたことは10HA、GF、大本営に対し衝撃を与え、32Aに対する攻勢要求の因もなつた。

支隊の戦力及び全般の計画からみて当然のことではあつたが、遑つて水際における米軍の弱点とも思い合わせ、Aとしての処置につき考慮させられる点である。

b 前進陣地(とくに161高地)守備部隊の持久度

(1) 161高地の戦斗

4-05 午後の攻撃を撃退し、6日終日の戦斗ののち、同日夜撤退した。

○ 守備兵力: 中隊長の指揮する2cpt(LG-9, MG-2, MW-4)

○ 攻撃部隊: 砲兵に支援された2Bn

○ 陣地の強度: 野戦陣地を併用した洞窟陣地(約2ヶ月準備、11月末より築城を実施したものとすれば約4ヶ月間)

○ 弱 点: 砲兵の支援なく、かつ孤立した陣地であつたため、包囲迂回に対し弱点を形成

(2) 神山付近の戦斗

○ 4-03~04の2日間、持久す。

○ 守備部隊: 1Co/131Bns

○ 攻撃部隊: 砲兵、電砲、TKに支援された1=1R

○ 弱 点: 地形が堅固でなく、とくにTKに対し脆弱

(3) その他の前進陣地

史実上、主陣地帯の位置が不詳で米軍戦史も日本側記録と著しく異なるので論述できない。

(4) 前進陣地の抵抗度が及ぼした影響

(a) 各前進部隊の持久度は比較的小であつたが、絶対的戦力の懸隔した状況であるので止むをえないと思われる。

しかし、主陣地帯内の拠点においてはたとえば、城間陣地、前田の各拠点のように完全に孤立した後においても、なおよく頑強な抵抗を持続した。

これは、拠点の守備に当る部隊の大きさ（中隊では戦術的運用の余地が少ない）或いは砲兵支援の有無にも関係するが陣地を固守するか、結局は撤退するのかわという意志の問題も大きな要因となつたものと推定される。前進陣地守備部隊はその本質上、精神力において主陣地守備部隊に劣ることが考えられる。

(b) 前進陣地の抵抗により主陣地守備部隊に若干の準備時間を与えた利はあるが、最大の功績は、主陣地帯の位置の秘匿という点であろう。すなわち米軍をして不用意、不調整のままわが主陣地を攻撃させることとなつた。

(c) 米軍戦法を偵知することができし後のわが対策のための資料を提供した。

c 4-09~10における嘉義主陣地守備部隊(131Bns)の防禦戦とくに成功の原因

(1) 要 旨

準備の周到、131Bnsの精銳、およびBn長の戦斗指導の適切により、偉大な戦果を挙げ、米軍の心胆を寒からしめた。

(2) 準備の周到

(a) 地形の活用、反斜面陣地編成の適切

- 前面の深い谷地を対TK障害に利用してその攻撃方向を中央街道方面に限定し、また、対歩兵のため彈幕地帯を構成した。
- 前方斜面および頂上には、砲、迫、MGの火網を構成し、反斜面にも、MG等の側射、斜射、背射による火網を濃密に配属した。
- 嘉義部落の囲壁を陣地の拠点に利用
- 陣地は反対斜面に洞窟陣地を作り優勢な砲迫に対し掩護

(b) 相互支援の良好

- 陣地の翼、特に右翼、中央街道方面に隣接Bnとの相互支援により掩護し、敢に正面攻撃を強要した。
- 陣地の後方浦添断崖高地による軍砲兵の監視、観測
- すぐ後方の伊祖付近に陣地を占領していた臼砲連

隊の密接な直接支援

(3) 戦闘指導

(a) 米軍に対し次のように不利な戦闘を強いた。

- 陣地がよく秘匿されていたので攻撃部隊は事前に目標を確認できなかつた。
- 米軍は地形に制限され正面攻撃を行い、かつ、歩戦チームが使用できなかつた。
- 日本軍の弾幕射撃及び不意急襲の火力の集中により攻撃部隊は前後左右に分離されて相互支援も増援もできない状況に乗り、日本軍は機を失せず逆襲を実施した。
- 上記により紛戦状態を作為し、米軍の艦砲射撃を困難にした。
- 320日砲弾の与える精神的威力が大であつた。

(b) 13iBnsはよく団結し、あくまで陣地を固守して戦闘した。本部隊は実戦の経験豊富であり、極めて精鋭であつた。特にBn長原大佐は黙々として任務に邁進する指揮官であつた。

(4) 本戦闘の影響

(a) 米軍は、日本軍の状況をよく把握していなかつたため、調整された攻撃を実施できず、戦況が停滞したため、翌11日から主攻を東海岸方面に変更した。また結戦のため日本軍戦法を理解せず、損害が大で、結局13日以降攻撃を中止せねばならなくなつた。

(b) 嘉敷陣地はわが主陣地帯左翼における最重要拠点であり、本陣地が健在したことは、第1陣地帯全般の戦闘に偉大な貢献をなした。

(c) 13iBnsはよく戦闘したが損害が大であり、12日、272iBns、13日273iBnsの増援を受けたが、15日、23iBnsと交代せざるをえなかつた。すなわち陣地を確保した利は大であるが、人員損耗の痛手もまた大であつたのである。

d 4-19~20における牧港付近62D主陣地左翼崩壊の原因

(1) 陣地構成上の弱点

(a) 牧港付近は64Bと63Bとの境界に当り城間、伊祖付近を守備した211Bnsの陣地は丁度、陸正面と海正面の接合部に当る弱点であつた。

(63Bと64Bの境界は15日に変更され嘉敷以西は64B担任になつたとの史実があるが、64Bとして急遽配備変更は困難であつたと思われる)

(b) 牧港低地は拠点となる地形に乏しく宇地泊を奪取されてからは、火網により閉塞せざるを得なかつた。

(c) 火網構成上の欠陥

62Dは固有砲兵を持っていないかつたので、臼砲及び軍砲兵の協同に期待せざるを得なかつたが、これらの火力を臨機迅速に指向することは困難であつた。

(2) 4-18夜における戦闘指導の失敗

(a) 不用意にも奇襲を受けた。

米軍の夜間行動は、企圖の秘匿、欺騙、良好で、周到な準備のもと果敢に実施された。これに反し日本側は「米軍は夜襲を行わない」との先入感により警戒に欠ける所があつた。

(b) 211Bnsは初動を制せられて機を失せず逆襲を実施

することができず、19日の昼間を迎えることとなつた。

米軍は昼間を利用し、確乎たる地歩を築き、兵力を増強して201R基幹となつた。

(3) 4-19以降における戦闘指導の失敗

(a) 19日夜の逆襲は211Bns主力により行われたが、米軍を撃退するに足る兵力ではなかつた。

当時、64B長は状況を的確に把握できず、Bn長の意見具申に基いたものである。

(b) 20夜の逆襲は、211Bnsの残部、151Bns、III Bn/221Rを以て実施したが、このとき米軍はすでに兵力を増強して301Rとなつていた。

151Bnsの局部的成功も全般に戦果を拡大する纵深戦力なく、また、米軍の熾烈な艦砲射撃により前進が困難であつた。

(c) 米軍は前線にますます確乎たる地位をえた。しかしその反面側背、とくに嘉敷方面では27Dと96D間に大なる間隙を生じ危険な状態となつていたが、日本軍はこの弱点を発見し得ず又これに乗ずるための兵力もなく、やがて米軍はこの危機を解消することができた。

(4) 本戦闘失敗の影響

(a) 嘉敷陣地の保持が危険となり、やがて第1陣地帯を全面的に後退させる1原因となつた。

(b) 西海岸正面より兵力を転用したので同方面の配備が手薄となった。これがためAにおいて新たな手段を講ぜざるをえなくなった。

(c) 64Bの人員損耗が大で、その戦力は著しく減退した。

すなわち、211Bnsは兵力の大半を失い151Bnsが、以後安波茶付近を防備するためには、兵員の補充、増援を必要とした。

。 4-20、伊祖付近における64Bの逆襲とくにその失敗の原因。

(1) 本逆襲の意義

64B長が全力を挙げて行い、伊祖付近において敵に多大の損害を与えたけれども、全陣地の奪回は成らず、かえって多大の戦力を消耗し、ついに62D陣地左翼の崩壊を決定的ならしめた。

(2) 失敗の原因

(a) 兵力の逐次使用と戦力の分散

全正面の守備に任じていた211Bnsは18、19日夜の逆襲によりその戦力の大半を消耗していたので64Bは殆ど新に投入した151Bnsを以て、新鋭の米27Dに対することとなった。

また、攻撃方向も各隊バラバラでBとしての戦力集中ができていなかった。

(b) 火力の不足

米軍は約1週間の準備を行つたのちの総攻撃の第2日目であるから、優勢な艦砲、砲兵の支援火力が大で、わが火力では到底対抗できなかった。

(c) 戦果拡大の縦深戦力を欠いていたこと。

伊祖付近の戦闘では、ピナクル占領部隊と逆襲部隊の連繋がよく、米軍をして約506名の死傷者を生ぜ

しめる戦果を挙げてこれを撃退した。しかし、これを
牧港付近まで拡大するの余力がなかつた。

5-04~05 A主力の攻勢における IBn/32iR (伊東大
隊)の攻撃、とくにその成功の原因

(1) 本攻撃の意義

本攻撃は、D左突進隊の第1線たる i1=Bn が夜間滲
透戦法により、敵陣深く一挙に挺進して、後方要点であ
る棚原付近を占領したものであり、敵の後方とくに、指
揮補給組織を擾乱し、敵に驚愕を与えるとともに、友軍
の士気を鼓舞する上にも大きな功績があり、本戦闘の状
況は上開に達せられた。

しかしながら、全般態勢上、本戦闘の成果を利用拡大
することが出来ず、多大の損害を被つて後退を命じなけ
ればならなかつたのは遺憾である。

(2) 成功の原因

(a) Bn長の卓抜な機眼と果断な実行力

(b) 突破点選定及び攻撃方向の適切

よく敵配備の隙に乘るとともに、中央道路に沿
う敵の夜間弾幕射撃をわが左側の掩護に逆用した。

又夜襲の方向を低地より高地に向うようかねてから
研究・訓練していた。

たまたま、5-04黎明攻撃では、Bn長の意図が
C0長に通せず、C0長は進路を誤り高地寄りに敵陣
地正面に進出して失敗したが、同日夜の夜間攻撃では、
予ての研究による進路を選定した。

(b) 進館の周到、時機選定の適切

5月4日の昼間敵情地形の暗識を徹底し、企図を密匿して十分な準備を整えた。また黎明攻撃の失敗に鑑み、夜暗のうちに目標まで縦深に突破を完了できるよう、必要な時間を予定して攻撃開始の時刻を定めた。

(c) 剛胆果敢な実行

B 中隊長を中心とする強固な団結のもと各級指揮官もまた率先難局に臨み、断乎として実行したことが反つて敵の意表に出で、かつ、対応の余裕を与えなかった。

(d) 他部隊との関係

連繫して攻撃していた他の諸部隊の行動が結果的に本B中隊に対し、牽制的効果を挙げた。

5月4月下旬～5月上旬、前田付近における121Bns(賀谷大隊)基幹の敵中孤立戦斗とくにその成功の原因

(1) 孤立するに至った原因

前田付近の陣地は第2陣地帯として準備されたものではないが、配備変更前の既設工事、後方部隊が実施した施設を利用し応急陣地を準備した。

しかし、後退部隊の寄せ集めで統一指揮が実施できず、かつ、敵の攻撃開始までに時間の余裕がなかったため、初動において敵の滲透攻撃を許し、じ後、包囲孤立させられるに至った。

(2) 孤立戦斗の実施

既設洞窟を利用することにより、反斜面に陣地を掘成していたので、馬乗り攻撃を受けかつ孤立化させられたのちも、なお、頑強な抵抗を継続することができた。

前田断崖の洞窟戦斗は、沖縄における最激戦の1つであつて、日米両軍が、従来を経験を活用し、秘術を尽し、巧妙かつ激烈に実施せられた。米軍は火陥、爆薬、TKを用い、両軍の間に夜間戦斗、白兵戦斗が繰り返された。

しかし、日本軍は次第に戦力を消耗し、陣地を破壊され、とくに、洞窟にとつて最大の脅威であるTK、火陥TKの進出により洞窟内に押し込められる状態となつた。

(3) 全般戦斗指導

(a) A、DおよびBとしても、極力救援攻撃を行い、重砲兵の主火力をも指向した。

また、Aの攻勢がこの方面に近く実施されたことも敵の包囲の圧力を減少し、孤立部隊の持久期間を引き延ばす支援となつた。

(b) 救援攻撃

32iR(-I)、26iBns、29iBns、275iBns、III TAs、17MGBns等が再三救援に赴き、前田付近の奪回を試みたが、彼我戦力の懸隔のため成功せず僅かにII/32iRが増援に成功したが打破できなかつたばかりでなく、自らその圏内に入って孤立化し、しかも、終戦まで脱出できなかつた。

(4) 孤立戦闘成功の原因

(a) 63Bの各隊は、Bn長の統率がすぐれ、兵は精強で実戦の経験に富んでいた。従つてあくまで必勝の信念のもと頑強な抵抗を継続することができた。とくに支那における体験上、被包囲下にあつても、びくともせずなお韌強性を発揮する特性を持っていた。

(b) B、DおよびAの救援

(c) 既設洞窟の活用

(d) 米軍戦力の消耗

わが方のみならず、米軍もまた19日以来の攻撃で多大の損害を受け、部隊交代を必要とした。

(e) 地形上、米軍はTKの自由な使用を制限されていた。

h 天久台付近における15MiRs/44MBnsの防禦戦闘、とくに、比較的時間の余裕のない場合の防禦力

(1) 準備の程度

(a) 既設陣地

本地域は、昭20、2以降62Dの15iBns(天久以北)、23iBns(安里、那覇)が防衛を担当して洞窟陣地を構築していたが、陣地は海正面に対し編成されていた。

15MiRsは4月末より、32Aの攻勢までの数日間一時この地域の配備に就いたことがあつたが陣地構築等の余裕は少なかつた。

(b) 準備日数

5-06攻勢中止の命を受け、翌7日朝までに新しく防禦配備に就いたが、天久台は10日より、安里付近は12日より攻撃を受けた。

準備日数

{	天久台	約3日間
	安里付近	約5日間

(2) 彼我の兵力

(a) 米軍

優勢な艦砲、航空、砲兵の支援を受けた6MDで、5-09、戦線を1MDと交代したばかりの新鋭である。

(b) 日本軍

当初は44MBsの右地区隊たる15MiRs(-1=Bn)(+1=Bns)である。その後、戦闘間に固有部隊である1=Bnが復帰したほか海軍関係特設部隊の増援を受けた。

15iRsは内地編成で実戦の経験はないが素質は良好であつた。しかし増援された特設部隊は訓練素質も15iRsに遙かに劣つている。

(3) 持久日数

天久台(1=Bn)	5-10~15	6日間
52高地(3=Bn)	5-12~19	8日間
安里付近(1=Bn)	5-12~24	13日間

(4) 彼我損耗

(a) 米軍(6MD)

死傷者	2662名
戦闘疲労者	1289名

(22MR, 29MRにおいては、3名のBn長、11名のC○長が死傷す)

(b) 日本軍

- 15iRsの残存者 約500名余
(編成時の人員 1859名)
- その他の部隊 大半死傷す

(5) 一覽表

	日本軍	米軍
兵力	当初 3=Bn 基幹 戦闘間 9=Bn "	6MD
準備日数	3~5日間	1~2日間
持久日数	天久台 6日間 52高地 8日間 安里付近 13日間	
損耗	戦死 約70%	死傷 2662名 (約11%) 戦闘疲労者 (約5%)

注：日本軍の増援兵力(6=Bn相当)は、何れも陸戦隊及び特設部隊であつた。

(6) 本戦闘の意義

- (a) 長期にわたり、32A首里陣地左翼の要点を確保して米軍の包囲企図を防止するとともに多大の損害を与えた。
- (b) 準備の余裕が少かつたに拘わらず、長期防禦力を発揮できた原因は次のとおりである。
 - 15MiRsの精鋭と増援部隊を含めての各隊の決死敢闘
 - 反斜面陣地により敵砲火を封じかつ、地形の利用により、TKの行動を制限できたこと。
 - 後方の制高地帯を観測所とするわが砲兵支援の適切

1 参考所見

(1) 日本軍の偉大なる精神力

戦斗惨烈の極所に至るもなお不屈不撓精神的に任務を完遂せんとする責任観念、隊長を核心とする強固な団結力、寤れてやまざる忠誠心等、旧軍における伝統精神を遺憾なく発揮したものであり、深く敬意を表するとともに、精神力こそ戦斗力の基盤であることを再確認する。

(2) 訓練の精華

部隊の精鋭さは直ちに部隊の士気、戦斗技術に現われ、敵側にも敏感に反応することが示された。すなわち、相手側に対し「これは手強いぞ」という感じを持たせることは圧迫感を与えることであつて、われは、精神的優越の地位に立つこととなる。訓練こそ必勝の信念の源泉である。

(3) 連大隊の戦術的運用

(a) 防禦においても受動に陥ることなく、積極的な戦斗指導が行われたのは、指揮官の能力の優秀にもよるが、これを可能ならしめた要因の1つとして築城の準備と利用が挙げられる。準備の周到な塹壕、部隊になるに従い、積極果敢な戦斗が実施された。

すなわち、築城の利用により兵力を転用し、あるいは短切な逆襲や挺進攻撃を実施し、敵を致して不利な地点に誘致するなど防禦においてもなお機動力の発揮に努めた。

(b) 戦力の温存

優秀な指揮官はよく諸戦力の温存に努め、超強なねばり強い戦斗を実施した。米軍が消耗戦法を取つたので、もし血気にはやつた行動に出たならば、全く敵に致されたと言えよう。

(c) 戦法の創意工夫

対砲爆撃、対T.K.、洞窟戦斗等において日々の戦訓に基き、灌刺たる創意が実施された。それは米軍の例においても同様である。戦法の進歩から見て、彼我両軍の一進一退が顕著であつた。日本軍は術において敗れたのではなく、戦力の補給培養源の枯渇により力尽きた感が深い。

(d) 逆襲の失敗

逆襲は攻勢行動であり、少くもその時機、その正面においては敵に優る戦力(火力)を発揮する必要があり、従つて成功に導くためには巧に戦機を掴むことと、至当な戦力を指向し十分にこれを発揮する必要があることは言う迄もないことである。防禦においては極めて超強な戦斗を実施した部隊が屢々逆襲に失敗し、一挙に大なる損害を受けた例が多いが、原因は或いは戦機を逃し、或いは兵力の逐次使用に陥り、或いは準備の不十分に帰せられる等いずれも防禦戦斗指導上注意すべき点と考えられる。

TK、FA部隊の戦いおよび音、特機の協同

主要段階における27TKRの用法、配置および戦い

(1) 27TKRの本作戦における価値

27TKRは本作戦間、よく戦いし、立派に戦つたに拘わらず、TK部隊としての戦績を挙げえなかつたのは、TKの性能上威力が小さかつたこと、一般にTKに対する理解と信頼に欠け、十分な協同を実施しなかつたことによる。

TKの大半を喪失したのち、連隊は歩兵部隊として首里陣地の重要部を防禦し、赫々たる戦功を樹立した。

(2) 攻勢までの段階

(a) 賀谷支隊とともに運搬行動に使用する案も考えられるが、熾烈な砲爆下、錯雑地の機動により大きな損害を被るおそれが大である。従つてA主力の戦い時まで兵力を温存する方針が適当であつたと思われる。

(b) 11Bnsの北上に伴い、運玉森、与那原方面が手薄となつたので、4-11-5-02の間、同方面の防禦を担当した。

南風原の対空挺警戒は一応特設部隊担任し、必要に応じTKRの転用を考えられたものと思われる。

S2Aとしては予備がなく、TKRを中城湾上陸に対する防禦に使用したのは止むをえぬ処置であらう。

(c) 機動砲兵中隊により神山島の砲撃、与那原付近の敵

後方擾乱を実施しているが、軍砲兵の機動困難な全戦状況下において迅速に移動し、位置を秘匿できる遊動砲兵を使用した著意は適当である。

たゞし効果は大して無かつたようである。

(3) 攻勢段階

(a) 使用の時期

32Aとしては最後の決戦であるので、成否は別としてもこの時期に使用すべきである突破に使用するか戦果拡張に使用するかも問題であるが、地形上、第1線突破に使用したのは適切である。

(b) 使用方面

地形上TKの行動に適する中央街道方面に使用したのは適当である。

東海岸方面で、221Rまたは、891R正面に使用するときには、敵艦砲の射撃の威力大で上原高地への突進が遅延するおそれがある。

(c) 攻撃実施

敵火の威力が大であるため、LTKは破壊され、MTKは官城—首里—石嶺道による夜間機動のため進出が著しく遅延し、大なる成果を取れ得なかつた。

(4) 防禦の段階

(a) 石嶺付近の防禦

石嶺付近は首里北面陣地の最重要部であつたが、首里秘匿飛行場を一举に突進する敵TKを阻止した巧謀は大である。

(b) MTKを固定トーチカとして使用したのは、集結機動用法を行うに優つており、その成果も大であつた。

① 主要段階における軍砲兵隊等の用法、配置および戦斗

(1) 本作戦における軍砲兵隊の功績

太平洋戦争中日本軍として最大の砲兵部隊が使用せられ、その運用にすぐれ威力の大であつたことは、米軍も賞讃するところであつた。

(2) 軍砲兵司令部の活動と統一指揮

砲兵戦斗において、司令部の存在は大きな価値を有する、本作戦においても測量の統制、射撃準備、戦斗計画の指導等砲兵戦斗に大きな役割を演じたものと推定される。

但し戦斗開始後の火力戦斗は概ね各部隊々々担当正面に対する各個の射撃となり司令部の統一指揮による多数の火力の離合集散の如きは実施されなかつた模様である。これらは当時における通信装備、射撃指揮組織、訓練の状況と、敵の制空権等により我の射撃が著しく制限され、可能な部隊が可能な時機に射撃するといつ々実情に支配されたものと考慮される。

(3) 築城

周到に構築された築城により、損害を減少し、戦力を長期に互り維持した。しかし急降下爆撃により洞窟利用の砲門が屢々埋没した例もあり、また開口部に被弾して洞窟内の人員、弾薬を一挙に失つた部隊もあつた。

(4) 配 置

当初は、いずれの正面にも応ぜられるよう配置されていたので、陸正面支援には支障がなかった。

飛行場射撃のため上原高地の千原に配置した15Kは僅か2門であつて効果は少かつた。もし、飛行場火制の熱意が更に大であれば、より多くの火炮を配置することも可能であつたらう。

(5) 射撃実施

(a) 賀谷支隊の遅滞行動および前進陣地の戦闘間より射撃を開始するか、主陣地の戦闘開始後に行うかは決断を要する問題であつた。32Aとしては前地の遅滞はあまり重視せず専ら主陣地の戦闘まで戦力を温存したが、これは全般の作戦構想に基くものであつたと思われる。

(b) 射撃の主体は敵の歩兵及び戦車の阻止であつたと判断される。

(本土防衛の際は対TK主体の思想が強かつた。本作戰でも15榴級の射撃はTKの阻止に相当効果があつた模様である。)

これは制空権下のしかも劣勢な砲兵としては当然と判断される、なお当時の通信、連絡組織から、第1旅との密接な協同には不十分な点も相当あつたと思われる。

c. 嘉敷および天久台戦闘における普、特の協同とくにその成功

(1) 普特の協同の見地よりする両戦闘の特性

(a) 両陣地ともAの第1及び第2陣地帯における重要な左翼拠点であつて、敵の突破ならびに海岸方面からの包囲を封止する重要陣地であつた。又ともに反対斜面に洞窟陣地を編成し、その後方にこれを瞰制する要線をも有していた。

(b) 陣地の火力編成は至近距離の火網を主眼としていたこと、砲兵は敵に比し劣勢であつたこと等により、砲兵の射撃は歩兵の要求する近距離の地点に限られていた。

(c) 砲兵陣地は損害減少のため分散していたこと及び当時の日本軍の射法により同時に大火力の集中は行われなかつたが、適時適所に火力が指向された。また軍砲兵の観測所、陣地位置は支援に有利であり、固有砲兵の少い44B、62Dに対して全力支援が可能であつた。

(2) 普特協同成功の原因

(a) 良好な砲兵観測所

嘉敷に対しては浦添断崖の高地より、天久台に対しては首里—識名—長堂の高地帯より、歩兵戦闘に掃き込込まれることなく十分に監視観測を実施できた。

(b) 歩兵の要望する火力配置

歩兵陣地は反斜面に洞窟を以て編成され、短距離に斜射、側射、背射火網を構成していた。従つて、頂上、前方斜面、および迂回を封する側方地区に集中火力を配置することを要望していたが、砲兵の視測所、および陣地はよくこれに応ずることができた。

(c) 陣地の秘匿、掩護

歩兵は反斜面の洞窟により、砲兵は分散、秘匿、築城により、近接戦闘開始以前に破壊されることなく主要時期まで戦力を温存し、弾力性ある戦闘を可能にした。

(d) 相互の密接な連繫

常に通信連絡が確保され、また、相互の理解と信頼により、戦機に応ずる火力を発揮した。

とくに、逆襲と支援火力の連繫が良好であつた。

d 攻勢時(5-04朝)における1Bn/321R正面の普機の協同、とくにその失敗の原因

(1) 普機協同上より見た本戦闘の特性

本攻撃は、32A攻勢時、左突進隊正面において行われたものである。

攻撃は、彼我戦力の絶対的懸隔下において準備不十分のまま実施され、多大の損害を被つて失敗した。

普機の協同は、頗る不十分であり、相互殆んど連繫なく攻撃を実施した。

しかし、本戦闘が失敗したのは協同の不十分のみによるものではなく、たとえ、協同が良好であろうとも攻撃は成功しなかつたであらうと思われる。

(2) 普機協同が失敗した原因

(a) 相互の理解と信頼が欠けていたこと1Bn長はわがTKの性能弱体のためTKの威力を眼中に止めることなく、殆んど協同しようとする意志を持たなかつた。TK(R)もまた協同についての熱意が薄かつたようである。

(b) 命令の不明確

27TKRは24Dに配属され、[当初左突進隊に協力、引き続き中突進隊に協力]すべき命を受けた。

また、321Rは1Bn長に対する命令で[第1線の攻撃にあたり戦車隊これに協力する旨]とのみ示してある。